

# af News

公益財団法人 旭硝子財団

〒102-0081 東京都千代田区四番町5-3 サイエンスプラザ2階  
TEL (03) 5275-0620 FAX (03) 5275-0871

URL <http://www.af-info.or.jp>

E-MAIL [post@af-info.or.jp](mailto:post@af-info.or.jp)

2011年9月

第41号

## 平成23年度 研究助成金贈呈式

旭硝子財団は、6月7日午前、関係者列席のもと、経団連ホールにて研究助成金贈呈式を開催しました。冒頭、田中理事長の挨拶、大村謙二郎選考委員長による選考経過の説明があり、続いて理事長から助成金受領者の方々へ贈呈状が手渡されました。

引き続き、渡邊淳平・文部科学省研究振興局学術研究助成課長のご祝辞をいただきました。

最後に、助成金の受領者を代表して安藤和也・東北大学助教

公益財団法人 旭硝子財団  
平成23年度 研究助成金贈呈式



からご挨拶があり、贈呈式を終えました。その後、別会場で懇親パーティーが行われました。

本年度、国内で新規に採択された助成研究は79件、これに過年度からの継続分29件を合わせると、国内の助成総額は2億6,900万円となります。

本年度の新規助成研究の一覧は、当財団のホームページ(平成23年度 採択一覧)に掲載されていますので、ご参照ください。



# 2011 旭硝子財団 助成研究発表会

7月26日、市ヶ谷駅前にある「ホテルグランドヒル市ヶ谷」において、国内助成研究73件(全分野)の発表会を開催しました。朝から夕方までの長時間にわたり、発表者をはじめ、現在研究助成を受けている研究者や当財団の選考委員、ご来賓など、多くの関係者にご出席頂きました。

冒頭、田中理事長の挨拶に引き続き、大村選考委員長(筑波大学教授)から開催にあたっての趣旨説明があり、続いて、それぞれの分野ごとに3分間スピーチとポスターによる研究発表が行われました。

助成研究発表会はもともと研究期間を終えたプロジェクトの成果発表という位置づけですが、それらに

加えて、助成金額が大きく、かつ複数年度にわたる研究助成プロジェクトについての中間発表10件も含まれます。

それぞれのポスターの前では、専門分野の異なる研究者同士による活発な意見交換が行われ、今までの成果についてだけでなく、今後どのような方向に研究を進展させるべきかといったことについてのディスカッションも行われ、非常に有意義な場となりました。

発表終了後には同じ会場で懇親会が開かれ、参加者全員による交歓が行われました。

ご出席者の方々、また、運営にご協力くださったすべての方々に、改めて感謝申し上げます。



大村選考委員長



3分間スピーチ発表会場



田中理事長



ポスター発表会場



懇親会場

# 海外研究助成金贈呈式 ならびに成果発表会

8月2日にタイのチュラロンコン大学において、次いで5日にはインドネシアのバンドン工科大学において、研究助成金贈呈式ならびに助成研究の成果発表会を開催しました。

## タイ・チュラロンコン大学

8月2日、チュラロンコン大学の Maha Chulalongkorn Building にて、研究助成金贈呈式と成果発表会が開催されました。田中理事長からの挨拶、Pirom 学長による開催の辞に続いて、今年度の助成対象



贈呈状を授与する  
田中理事長

者12名に贈呈状の授与が行われました。Lkkunaprasit 教授による記念講演に引き続き、3つのセッションに会場を分けて、合計14件の研究成果が発表されました。



贈呈式会場にて助成金受領者とチュラロンコン大学関係者、旭硝子財団関係者

## インドネシア・バンドン工科大学



Akhmaloka 学長  
から感謝状を受け取る  
鮫島専務理事

8月5日、バンドン工科大学 (ITB) の講堂において、研究助成金贈呈式と成果発表会が開催されました。ITB 学長の Akhmaloka 教授、鮫島専務理事の挨拶に続いて、助成対象者16名に贈呈状が授与されました。研究成果発表は、昨年度に採択された研究助成11件について行われました。材料やシステムの研究だけでなく、本年も地盤沈下原因の解明や野生生物資源の活用といった、インドネシアの自然環境にかかわる成果が発表されました。

助成金受領者と  
Akhmaloka 学長、  
鮫島専務理事



成果発表会での  
プレゼンテーション

# 『生存の条件』シンポ

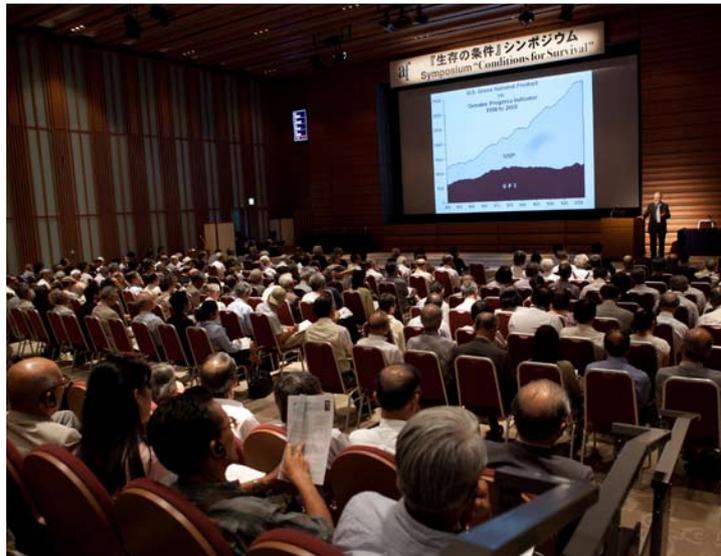
旭硝子財団では、2006年12月に「地球環境問題を考える懇談会」を発足させ、各界を代表する当財団の理事および評議員の叢智を結集して、3年以上にわたり人類が解決すべき課題について論議を重ねました。2010年5月には最終報告書として21世紀の新たな社会像のコンセプトを提示した『生存の条件 - 生命力溢れる太陽エネルギー社会へ』を1万部刊行し、全国の図書館、希望された一般の方々へ配布するとともに、ホームページからダウンロードできるようにいたしました。その後、同書は英語、中国語に翻訳され、さらに他の言語にも翻訳される予定です。

同書に対して国内外から共感の声が多数寄せられた

ことから、当財団は『生存の条件』シンポジウムを開催し、さらに多くの方々に新しい社会像をお考え頂く機会といたしました。講演者として、同書にご寄稿下さった

歴代ブループラネット賞受賞者の中から3名をお招きして、地球環境問題に対する考えを話して頂きました。

また、パネルディスカッションにおいては、森島昭夫名古屋大学名誉教授のコーディネートのもとに、『生存の条件』中国語版の出版に指導的役割を果たされた中国共産党中央党校の馬小軍教授にもご参加頂き、講演者3名とともに「新しい時代への発想転換」について語っていただきました。講演ならびにパネルディスカッションでのご発言の要旨をご紹介します。



レスター・R・ブラウン氏（米国）  
アースポリシー研究所  
会長 兼 上級研究員  
[1994年度受賞]

人類が築いてきた世界システムのなかで、もっとも脆弱なのは食糧供給だ。昨年ロシアを襲った熱波が世界の食糧需給にもたらした影響を精密に分析すれば、平均気温が1℃上がると穀物の収量が10%減るといように、今後の気候変動がもたらす危機的な食糧難を予測できる。同時に、食糧危機に対して一部の国が競っているランドラッシュがもたらす影響も深刻だ。

問題解決のために私たちが提案している「プランB」を実行するのに必要な金額は2000億ドル。じつは世界の軍事費の8分の1にすぎない。持続可能な社会を実現するためには強いリーダーシップが必要だ。

21世紀は20世紀とは異なった経済が必要なのだ。都市にフォーカスして、デザインも移動手段も異なる、いわば「住んだことのない世界を想像する力」が必要だ。

私たちが提起してきた地球環境の問題は、残念ながらさらに深刻化しているといわざるを得ない。しかし、同時にまだ時間があると前向きにとらえ、最大限の努力を行っていくことが大切だ。

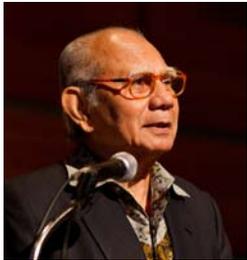
GNPの算出方法では、事故・災害、森林破壊など社会にとってマイナスの要素も経済活動を伴うためプラスに評価されるのに対して、ボランティア活動などは加算されない。これからは真の豊かさの達成度を示す進歩指数(GPI)を重視すべきだ。

林業に対する助成金が森林破壊をもたらすなど、道理に反した補助金が地球環境問題に負の影響を与えていることなども知っておく必要がある。

科学的、技術的な考察や提言といった知的資源はすでにあるのに、それを利用していないことが問題なのだ。



ノーマン・マイアーズ博士（英国）  
オックスフォード大学グリーン  
カレッジ・サイドビジネスス  
クールフェロー  
[2001年度受賞]



エミル・サリム博士  
(インドネシア)  
インドネシア大統領諮問委  
員会議長  
インドネシア大学名誉教授  
[2006 年度受賞]

産業革命以後の社会の問題点はゲゼルシャフト(利益社会)というキーワードで解き明かすことが出来る。例えば、かつてイスラム社会は神、自然、社会が調和しながら生きる社会だったが、産業革命以後は経済的合理性によって導かれるゲゼルシャフトに変貌。人間は自然を克服・利用することで成長し、その代償として、石油など再生可能でない資源が枯渇、同時に環境破壊が進んだ。

21 世紀の社会はウェル・ビーイング(より良く生きる)という理念で導かれなければならない。2050 年に向かってアジアの成長は続く。アジアは、これまでも経済成長と自然の豊かさを一定のレベルで両立してきたが、社会の問題を解決するためには、自然の付加価値を高め、同時に自然を通して命と暮らしのつながりを再活性化する道を模索すべきだ。

価値判断指標を転換し、多面的な取組みのもとに世界を変えよう。

中国のエネルギー源の中に石炭の占める割合は 7 割と、世界全体の 2 割と比べて非常に高い。国土面積の半数近くで酸性雨などの問題が起きている。

石炭依存を低下させるために多くの原子力発電プロジェクトが進められているが、福島第一原子力発電所事故など日本の経験からも多くを学びながら慎重に進めたい。

現在の中国は世界最大の温室効果ガス排出国となったが、中国は、世界の製品生産基地でもある。中国での生産には温室効果ガスの排出が伴うが、同時に輸出された製品が世界の人々の生活を豊かにしている。また、中国がグリーン経済の成長に注力していることも知ってほしい。

中国では、毎年、農村から都市への人口移動が進んでいる。都市の生活様式は急速に西歐化しつつあり、その動きは後戻りできない。こうした歴史的な流れを踏まえて環境問題の解決に取り組まねばならない。



馬 小軍 教授 (中国)  
中国共産党中央党校  
国際戦略研究所教授



シンポジウムの動画は、当財団ホームページに掲載されています(音声は通訳なしのオリジナルです)



森島 昭夫教授  
名古屋大学名誉教授  
[コーディネーター]

皆さんのお考えの根底にあるものは一緒だ、と実感した。残された時間は少ないが、人類が生存し続けるための戦いに共に挑むことは、大変光栄なことだと思えるようになった。



## 第20回ブループラネット賞 受賞者紹介

7月27日(水), 田中理事長, 吉川弘之顕彰委員長, 林良博選考委員長, 鮫島専務理事が出席し, 経団連会館において第20回地球環境国際賞「ブループラネット賞」の受賞者記者発表を行いました。本年度の受賞者は米国商務省次官, 米国海洋大気局(NOAA)局長のジェーン・ルブチェンコ博士と, インドのベアフット・カレッジです。

世界中のノミネーターから受賞候補者の推薦を受け, 選考委員会での審査, 顕彰委員会での審議を経て, 本年4月の理事会・評議員会で受賞者が決定されました。



### ジェーン・ルブチェンコ博士(米国)

米国商務省次官,  
米国海洋大気局(NOAA)  
局長



#### 【受賞理由】

海洋生態系の研究において地質学, 物質循環, 生態系の要素を取り入れた新しい領域を開拓し, 優れた学術的成果を挙げた。世界で最も多く引用されている生態学者の一人となり, 海洋生態学研究に大きな影響を与えた。生物多様性, 人間の健康, 経済, 科学者の社会的責任, 国の安全保障の間の密接な関係を示し, 科学者と社会の間の「科学者の社会契約」という独創的な考えに基づき, 地球環境問題に直面する科学者の在るべき姿を指し示した。

### ベアフット・カレッジ(インド)



#### 【受賞理由】

途上国農村地域の貧困や生活を支援する地道な教育活動を40年にも亘り継続し, 諸問題を住民自らで解決するのを支援することで大きな成果を挙げてきた。インドのみならず同様の農村地域問題を抱える途上国において, 地域の伝統的な知識を尊重し生かす一方, 小規模なソーラー発電を利用するなど新しい知識を援用し, 地域住民が自ら生活を改善することを学べる機会やシステムを提供する教育を実施してきた。こうして長期間にわたり各地で自然生態系に則した自立的かつ持続可能な農村コミュニティーの開発に成功してきた。

### ※ 第20回ブループラネット賞 表彰式典 ならびに 受賞者記念講演会 ※

第20回受賞者をお招きして, 11月9日(水)に表彰式典を東京會館で開催いたします。翌11月10日(木)には, 受賞者記念講演会を国際連合大学ウ・タント国際会議場で開催いたします。